

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 浅野 暁俊
学位 位 博士 (保健学)
学位記番号 新大院博 (保) 第48号
学位授与の日付 令和 4年 9月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度の開発

論文審査委員 主査 小山 諭
副査 関 奈緒
副査 坂井 さゆり
副査 田中 美央

博士論文の要旨

新卒看護師のバーンアウト要因の一つとして臨死期ケアが挙げられている。新卒看護師に対する教育・サポート体制が整備されてきている一方、臨死期ケアについての教育・サポートに関する検討が十分ではない。今後、高齢化による終末期がん患者の増加に伴い、新卒看護師が臨死期ケアを実践する機会が増加すると予測されることから、今回、新卒看護師バーンアウトの軽減および教育評価に用いることのできる、がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度を作成することを目的に本研究を行った。

研究は研究1～研究3の3段階に分けて段階的に進めた。研究1では、新卒看護師のがん患者の臨死期ケアに対する困難感の概念枠組み作成を行った。博士前期課程で実施した研究「一般病棟に勤務する新卒看護師の終末期がん患者の看取りケアに対する困難感因子21項目」の際に得られた自由記述データおよび困難感因子を、質的統合法 (KJ法) を用いて分析し、【無力感：どんなに経験しても無力な自分を実感する】【恐さ：経験の少ない臨死期ケアを行うのは怖い】【感情表出：看護師が看取りの時に泣くことは良いのか悪いのか戸惑う】【ジレンマ：臨死期ケアは答えのない場面との遭遇の繰り返しだ】および【学びたい：患者・家族の思いに寄り添ったケアが出来るようになりたい】という、困難感の概念構造を見出した。

次いで研究2では、がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度の内容妥当性検証を行った。研究協力が得られた全国38医療機関のがん患者の臨死期ケアを経験した2020年4月入職新卒看護師を対象に、困難感因子21項目と自由記述の分析結果6項目から構成される、がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度ドラフト版を用いて無記名自記式質問票WEB調査を行い、50名より得られた回答結果を検討し、修正ドラフト版を作成した。

最後に研究3では、がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度の信頼性および妥当性検証を行った。全国の新卒看護師1000名および臨床経験5年以上の一般看護師1000名を対象に、WEBおよび郵送法併用無記名自記式質問票調査を実施し、研究2の結果から作成した困難感尺

度修正ドラフト版28項目(修正ドラフト版)、臨死期ケアに対する困難感のNumerical Rating Scale(NRS)について検討を行った。信頼性は内的一貫性をクロンバック α 係数(α)、再現性を重み付け κ 係数(κ)にて評価した。妥当性は、構成概念妥当性を探索的因子分析(最尤法およびプロマックス回転)および確証的因子分析、基準関連妥当性は困難感尺度得点とNRSの相関から評価した。既知集団妥当性は、新卒看護師と一般看護師の困難感尺度得点の差を、Mann-Whitney U testにて検討した。その結果、新卒看護師179名(WEB:103名、郵送法:76名。回収率:18%、有効回答数:171名)、一般看護師203名(WEB:82名、郵送法:121名。回収率20%、有効回答数:194名)より回答を得た。探索的因子分析の結果5因子25項目が抽出され、因子1:気持ちが辛い、因子2:上手く対応できない、因子3:答えがない、因子4:余裕がない、因子5:死が怖いと命名した。5因子を用いた確証的因子分析を行い、適合度指標は $\chi^2=632.98$ 、 $P<0.001$ 、degree of freedom=270、GFI=0.77、AGFI=0.72、CFI=0.79、RMSEA=0.08であった。内的一貫性は、各因子の α が0.72-0.83、尺度全体は $\alpha=0.90$ 。再現性は各因子の κ が0.63~0.88、尺度全体は $\kappa=0.84$ であった。基準関連妥当性の結果、困難感尺度得点とNRSの間に正の相関を確認した。また、既知集団妥当性の結果、新卒看護師と一般看護師の困難感尺度得点の間に有意な差を確認した。

これらの3段階の研究結果を検討し、最終的に、5因子25項目で構成された困難感尺度を作成した。各因子を、【気持ちが辛い】【上手く対応できない】【答えが無い】【余裕が無い】【死が怖い】と命名し、信頼性および妥当性が確認された。困難感尺度を使用することで、新卒看護師が困難感を具体化することが可能となり、先輩看護師からサポートを受けることが出来ること、さらに、教育評価の1つとして活用し、新卒看護師における臨死期ケア教育への寄与が期待される。今後は、継続して困難感尺度を使用し、カットオフ値の検討およびバーンアウト、教育評価としての効果検証が必要である。

審査結果の要旨

上記論文について、主査1名、副査3名の計4名で審査を行った。

[保健(看護)の視点(価値)]の面から、保健学(看護学)の発展に貢献し得る着眼があり、新知見が見出されているかについて審査を行った。当論文は、新卒看護師のバーンアウトの一因である臨死期ケアについて、これまでに新卒看護師の臨死期ケアにおける困難感や困難感を示す尺度に関してほとんど示されていないことを問題として捉え、新卒看護師の臨死期ケアにおける困難感尺度を開発することを目的とし、5因子25項目から構成される新卒看護師の臨死期ケアにおける困難感尺度を作成した。臨床現場で活用できる可能性が示唆していることから、新規性、有用性、信頼性のいずれも秀でており、保健学(特に看護学分野)に貢献する優れた論文であると、判断した。

[構成と内容]の面から、題目・目的/背景・方法・倫理的配慮・結果/図表・考察・結論・引用文献などの項目について審査を行った。がん患者の臨死期ケアにおける新卒看護師の困難感尺度の作成を3段階に分けて、着実に研究を行なって尺度項目を作成しており、統計学的検討では探索的因子分析(最尤法およびプロマックス回転)および確証的因子分析、Mann-Whitney U 検定を用いており、適切な統計学的検討が行われていると判断した。また倫理面に関しては新潟大学倫理審

査委員会および調査施設各々の倫理委員会でのそれぞれの審査・承認を得て行っている。以上のことから題目・目的ならびに背景・方法・倫理的配慮に関しては十分な内容であると判断した。

結果/図表・考察・結論・引用文献に関して、適切な図表を用いて示しており、適切な引用文献を用いるとともに研究での限界も述べていた。これらから考察を十分行なっていると判断した。さらに公開審査においては、枚数の発表スライドにまとめており、スライドや配布資料、発表自体も聴衆に理解しやすいように工夫されていた。また、発表態度も堂々としており、質問にも自信を持って答えていると評価した。

以上のことから、研究課題の妥当性、情報収集能力、研究遂行能力、情報発信能力、倫理的配慮、論文作成能力の観点において審査した結果、博士論文に値すると判断し、合格と判定した。